



⑨ボタにまざった炭を拾う、落ち穂拾いのような光景。苦しい生活の中、生きるための貴重な収入源だった。
 ⑩表情豊かにお遊戯をする子どもたち。炭鉱で働くために移住者が増え、まちには多くの笑顔が輝いていた。
 ⑦今では炭鉱住宅の面影もなく、ボタ山は中央公民館などの公共施設や新興住宅地に置き換わっている。

①高くそびえるボタ山や黒煙が昇る煙突は、過ぎゆく時とともに忘れ去られようとしているまちの原風景。②鉱員やその家族を支えた長屋。路地は子どもの遊び場や住民の交流の場だった。③石炭の粉も大切に使い、微粉を固めた炭団(タドン)は暖房用燃料として使われた。④明治期の採掘現場では、手掘り採掘が行われ、死と隣り合わせの厳しい環境の中、鉱員は石炭を掘り続けた。

①炭鉱で商業も発展し、筑豊屈指の商店街を形成。その後、エネルギー革命の波にのまれて、数々の店舗が姿を消した。
 ⑨出炭量の増加により、主要線路から多くの支線が引かれた。三菱方城、明治赤池などの炭鉱、そして駅とともに商店街が繁栄と拡張を重ねた。⑩家庭では兄・姉が親代わり。生活は常に炭鉱と共にあった。

風化していくヤマの光と影

郷土の礎に

日本のエネルギーを生み出すエネルギーシユなかつての故郷。そして、多くの犠牲のうえに今を生きている私たちの生活。あの「方城大非常」から百年、私たちの故郷を振り返ります。

愛と人情を支えに 精一杯生き抜いた故郷

かつて私たちの故郷は、炭鉱と人の活気に満ちあふれたまちでした。今ではその面影はほとんどありませんが、日本の高度成長を支えるエネルギーを生み出すまちは、人もまたエネルギーシユで、にぎわいのたえない繁華街がすぐそばにあり、ぬくもりと人情にあふれた炭鉱長屋が、日々の生活を包み込んでいました。



「方城町と炭鉱」の著者 植田辰生さん(方城)

国内最大の産炭地として名を馳せた筑豊炭田の中でも、有数の鉱山だった三菱方城炭鉱と明治赤池炭業所。最盛期の鉱員数は、あわせておよそ5千人。旧3町の人口は今の1.8倍の4万4千人。福智山を背景に、巨大な縦坑と煙突が誇らしく立ち並び、周囲には映画館や高級料亭、旅館に芝居小屋、クラブやカフェなど、中央から集中したわが国最先端の文化が生活を彩り、今では考えられないほどの活況が広がっていました。

「赤池、金田、方城、どのまちも24時間眠らない町でした。過酷な労働ではあったでしょうが、その分、家族にそそがれる愛情も深かった。木造平屋建ての炭鉱長屋では、1棟4軒から6軒の家庭が共同で暮らし、まさに向こう三軒両隣の生活。精一杯生きて、家族への愛や周囲の

情を糧に生き抜いた時代だったと思います」と当時を振り返る植田辰生さん。発電所があるので、炭鉱長屋では電気代がタダ、水道代も医療費も無料。風呂も共同で、石炭輸送拠点の金田では商店が軒を連ね、商いの町としてにぎわいました。

日本最大の炭鉱事故 方城大非常から百年

今からちょうど百年前、方城炭鉱が開坑して6年目の大正3年12月15日午前9時40分、日本最大の炭鉱ガス炭じん爆発事故「方城大非常」が発生しました。激しい爆音とともに地面は揺れ、黒煙のきのこ雲が吹き上がるほどだったといえます。殉職者は名前がわかっているだけでも667人(福圓寺過去帳)。千人以上ともうわさされた多くの人たちが、この



まちの地底で、一瞬にして尊い命を落としました。親子や夫婦の入坑者も多く、784人(15歳以下)が孤児となり、炭鉱長屋では最愛の人を亡くした遺族の泣き声が幾日も響いたといえます。「炭鉱の路地で路頭に迷った小さな子どもたちは、どんな心境だったのか。方城大非常の犠牲者を供養



法齋を行ってきた福圓寺住職 富永秀元さん(伊方)

していくうえで、日々そのことを忘れたことはありません。昨年の百回忌で、かたちとしての法要は終わりました。しかし、尊い犠牲の上に私たちは生きているということ、支えあつて苦難を生き抜いて今があることを忘れてほしくはありません。人が忘れてしまえば、そこで歴史は終わってしまいます。方城大非常から百年がたちましたが、この節目にもう一度かつてのふるさとを思い、今日の礎となつてい

ることを振り返ってほしい」と福圓寺の富永秀元住職。大非常犠牲者の位牌や霊鑑がおさめられている福圓寺では、4代にわたつて百年間、住職が毎朝欠かさず供養してきました。福智町では、故郷の礎となつた炭鉱に思いを馳せ、方城大非常をはじめとする全ての炭鉱殉職者に対し、12月15日午前9時40分、町内全域の放送で、黙とうを呼びかけます。